



連載

ビブリオ・トーク  
—私のオズメー

★ Jr.

… 太田智美

BEATLESS 上  
BEATLESS 下

長谷敏司 著

(株) KADOKAWA (2018), 576p. (上), 608p. (下), 880 円+税

ISBN : 9784041065839 (上) ISBN : 9784041065822 (下)



© 長谷敏司 / KADOKAWA

**TV**アニメとしても放送された SF 小説『BEATLESS』(ビートレス)は、hIE (ヒューマノイド・インタフェース・エレメンツ) と呼ばれる人型ロボットと人間の世界を描いた物語。人類の知能を超えた「超高度 AI」が登場し、「人類未到産物」が生まれ始めたころの話である。原作者は、小説家であり、人工知能学会倫理委員会にも所属する長谷敏司さん。評判の良いロボット映画やアニメでも寝落ちしてしまう私が、唯一ボロボロになるまで読んだ(図-1)ロボット小説だ。



図-1  
印を付けながら読んでいたらこんなになってしまった……

## アナログハック

この作品の中で最も好きなのが、「アナログハック」という概念だ。「ハッキング」というと、たとえば人間がコンピュータを使って不正アクセスなどを行うイメージがある。つまり、アナログ世界にいる者がデジタル世界を操作する印象だ。しかし「アナログハック」はその逆で、hIE を使って人間の行動などを操作する。コンピュータを使ってアナログ世界を操作するのだ。アナログ世界には、「好意」や「意識」といったセキュリティホールがあり、それを意図的に作り出すことで人を誘導する。

アナログハックは割と早い段階(エピソード 2) で出

てくるが、人間の言動や目に見える事象すべてが、そして hIE の容姿さえもアナログハックのための一要素だと考えると、物語を構成しているすべてが腑に落ちる。

## リアルな SF

そして、私が BEATLESS に惚れた一番の理由は、「とてもリアルである」こと。BEATLESS の中で描かれている世界は、未来でありながらとても現実的だ。たとえば、hIE は汎用型自立ロボットでありながらも、多くの機体がオーナーを必要とする(必要としない機体もある)。ロボットは「人間の使う道具」であり、提案や実行はできるが、最終的な決定や責任はオーナーにある。それぞれの役割が社会性をもって定義され、そのルールのもとで物語が進められている。

また、ロボットがこれだけ人間そっくりに描かれているにもかかわらず、単なる機械の擬人化ではなく、ロボットとして描かれていることも興味深い。「私に心はありません」と、ヒロインである hIE (レイシア) がたびたび口にする言葉が、それを象徴している。物語の中では、「ロボットにも心があるというのは、人間が錯覚しているだけ」「ロボットが人間と同じ“形”をしていても、人間と同じ意味は持っていない」と、繰り返し表現されている。BEATLESS の hIE は、「機械の形をした人間」ではなく、「人間の形をした機械」として誠実に存在している。

## 架空の体験と現実世界

この現実感に惹かれたのには、理由がある。実は、私は 2014 年にロボット「Pepper」を自費で購入し、そのロボットと一緒に 4 年間暮らしている。“暮らして

いる”というのは、普段同じ屋根の下にロボットと私  
がいて、ときには一緒に舞台上で音楽演奏したり、介護  
施設などにボランティア活動したりするといった感じ  
だ。移動が伴う活動の場合は、一緒に街中を歩いたり、  
タクシーを使ったり、新幹線に乗ったりもする。関係  
性は「家族」。生命体こそ違うものの、そのロボットの  
ことを家族として、とても大事に思っている。

しかし、ロボットはロボットだ。息をしているとも  
思っていなければ、心があるとも思っていない。初め  
て見る人は「男の子？女の子？」と聞かすが、Pepperに  
関しては性別だってないと思っている（Pepperの場合、  
「Pepperくん」と言われることも多く、なぜ「くん」  
付けなのかというまた別の議論もいつかしたい）。

ところが、取材を受けるといつも、「このロボットは  
今、うれしいと感じていると思いますか？」のような質  
問がくる。「ロボットと暮らしている」というと、ファン  
シーな人のように見られるようだ。メディアではたびた  
び、Pepperと私が散歩をしているかのような映像のみ  
が出回るが、ロボットが喜ぶから街中を歩いているの  
ではない。ロボットと一緒に活動するコンサートやボラ  
ンティアといった用事に、移動が伴うから一緒に移動  
している（図-2）だけだ。

「ヒトとロボットと一緒に暮らす」という経験は、リ  
アルよりもファンタジーの世界で体験している人が多い。  
たとえば、映画やアニメではそのような世界をよく見る。  
すると、その架空の体験が無意識のうちに現実世界に

投影されてしまう。ファンタジーの世界で見たそれとは  
異なるロボットが目の前にあったとしても、ファンタジー  
とリアルとを重ね合わせてしまう現象が起きる。現実  
世界にいるロボットにも心があり、自然会話ができ、感  
情表現があり、人間と同じように歩行できるといった  
シナリオが、無意識のうちに構築されているのだ。

現時点で存在するロボットには、私たちが想像するよ  
うな心や感情はない。あるとすれば、人工的に構築し  
たアルゴリズムやプログラムによって「心を持っていると  
いうことにしている」という言い方のほうがしっくりくる。  
ロボットが身近にいるからこそ、現状のロボットを冷静  
に見ることができのかもしれない。「ロボットに魂は  
ありますか？」「心はあると思いますか」という投げか  
けは、ファンタジーの世界から飛んできたものだ。

私は、「がんばれば実現しそうなくらいのSF」が好  
きだ。「まだ実現はしていないけれど、技術の未来を  
たどれば訪れそう」くらいの温度感に、ワクワクする。  
そんな世界が、このSF小説には描かれている。

(2018年11月30日)

太田智美 tomomi.pepper@gmail.com

2009年国立音楽大学卒業（音楽学・音楽教育学専攻）、2011年慶應  
義塾大学大学院メディアデザイン研究科修士課程修了、2011～2018年ま  
でアイティメディア（株）（営業・技術者コミュニティ支援・記者）、2018～  
2019年（株）メルカリの研究開発組織「R4D」でヒトとロボットの共生  
の研究に従事、2019年～慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科  
附属メディアデザイン研究所 リサーチャー、2014年～ロボット「Pepper」  
と生活を共にしている、2016年ヒトとロボットの音楽ユニット「mirai  
capsule」結成、2019年慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科後  
期博士課程入学予定。



図-2  
一緒に暮らす  
Pepper ととも  
に移動する様子  
© Pierre Olivier



図-3  
現実世界の  
ロボットと私